# 巻　頭　言

## ■魅力あるPC建設産業に向かって

菅　野　昇　孝*

7月21日からの一週間，山口県防府と九州北部を集中豪雨が襲った。23～25日は福岡在で状況を目の当りにした。24日夕刻には市内各所で避難勧告が発動され数千人の方々が公民館，学校へ緊急避難を余儀なくされた。各所で観測以来最大の雨量を記録し，特別養護老人ホームへ土石流が直撃，九州自動車道への土砂崩れ，多くの家屋倒壊，浸水，数万世帯におよぶ断水など凄まじい被害をもたらした。急峻な地形を急流河川が覆う国土条件ゆえにもたらされた災害とは思うが，津波，台風，地震を避けられない日本を考えるとき，これら防災の重要性があらためて感じられた。このような「防災対策」をはじめ，「荒廃するアメリカの轍を踏まない」，「地球温暖化抑制の喫急な施行」は当然必要とされるインフラ整備であり，その実行部隊である建設産業の使命は大きく，われわれPC業者の出番は多いと思う。

PC建設業協会では，平成19年に「PC建設産業の未来に向けて」と題した中期ビジョンを策定し，「社会的責任の遂行と活力あるPC建設産業」を目指して「限りないPC技術の発展と価値の向上」を探求することとしている。さて，それを着実に実行するためには何が重要かと考えたとき，やはりそれは「人材」だと思う。

しかしながら，PC業界における事業量は年々縮小し，ピークの1999年に対し半減の状態である。それに比例するようにPCに関係する人員も減少し，4 000名を超えたPC技術協会個人正会員数は3 000を割るに至った。海外から移入した技術とはいえ，官学民が一体となり技術開発に邁進し世界のトップにまで昇り詰めた日本のPC技術をこのまま衰退させるわけにはいかない。日本でPCが産声を上げた頃に生まれ，PCを生業とした企業に入社して多くのPC技術の恩恵にあずかってバトンを受け継いだわれわれ世代の責任は重い。

入社以来右肩上がりの成長を続け，海外留学・研修，海外視察団への参加や技術開発費に事欠かずにさまざまな教育の場を与えられた。そういうなかでPC技術の素晴らしさを実感し，大プロジェクトに参画する機会を与えられて，職場環境，報酬が恵まれずとも技術者としての誇りを感じつつ過ごしてこれた。今般の建設冬の時代のなか，多くの予算は充当できないものの地道な教育が重要だと，昨年，全技術者を対象としたセミナーと通信併用の社内教育プログラムを策定し実施を始めた。このような教育は社員の技術力向上には寄与するものの，PC技術を魅力あるものと感じるところまでの効果は期待できない。携わる技術者が魅力ある技術と思えずして，魅力ある企業，産業とはなりえないと思う。

本年6月，信楽高原鉄道の第一大戸川橋梁がPC橋初の国の登録有形文化財に登録された。1954年の完成でPC技術の導入からわずか2年目に架けられ，55年後の現在も健全に供用されている。このニュースを聞いた時，あと10年先に現役である保証もない年齢に達しながら自分もこのような構造物の建設に携わってみたい，などと思ってしまう。その後，同橋建設時の中心的技術者であられた仁杉　巌博士を囲む会に出席，建設時の様子を知る機会を得た。同橋は，関係した技術者の新技術挑戦とかぎりなく高品質な構造物を造り上げるという執念の結晶であったことを知り，身の程知らずに恥じ入った。

しかし，こういった構造物を構築し得る業界にいる喜びを感じたことは事実であり，このような構造物を残すこと，いいものを造ることで大きな喜びが得られることを若手技術者に伝えていくことが重要だと思う。「人の役に立つ」，「もの造り」，「地図に残る仕事」などは，建設を選択するほとんどの若者が抱く夢であり，少なくとも潜在意識はあるはずである。PC技術がこれらの実現への道筋になる，と若手技術者に感じさせることができたとき，PC建設産業の未来は明るいものとなる。

【2009年8月10日受付】

* *Noritaka SUGANO*：本協会監事 ㈱富士ピー・エス 取締役常務執行役員